

FD 活動報告

特色ある FD 活動を実践している大学の視察報告

Inspection of Universities Practicing Distinctive Faculty Development Activities: A Report.

教務委員会（吉原秋^{*1}、川崎雅志^{*2}、菊池直子^{*3}）

Academic Affairs Committee (Aki YOSHIHARA, Masashi KAWASAKI and Naoko KIKUCHI)

Keywords: Faculty development, Nanzan Junior College, Kinjo Gakuin University
FD, 南山大学短期大学部, 金城学院大学

1. はじめに

本短期大学部は、2008 年度に財団法人大学基準協会の認証評価を受審し、短期大学基準に適合する認定を受けたが、評価結果に助言を付された。『独自の FD 活動としては、過去に教員の意識調査を実施した程度であり、独自の取り組みはほとんど行われていないので、組織的な FD 活動を活発に行うことが望まれる』という助言であった。

そこで、独自の組織的 FD 活動に取り組むべく、2008～2009 年度教務委員会により、第 1 回 e-learning 講習会（2009 年 2 月）、第 2 回 e-learning 講習会（2009 年 9 月）が開催された。

2010 年度は、FD に先進的に取り組んでいる短期大学の事例を学ぶため、宮崎学園短期大学の宗和太郎氏を講師に招き、テーマ「ファカルティ・ディベロップメントへの組織的取り組み」の講演会を 8 月に開催した。また、学生による授業評価調査を活用し、授業改善の効果を検証した。これは、専任教員が「次学期以降に向けた取り組み」として前年度の自己点検票に記載した内容に関わる質問を独自に設け、学生から直接に評価を受けるものである。各教員が改善の成果を検証、認識することにより、次期の授業に役立ててもらうための取り組みである。

2011 年度は、前年度に引き続いて授業改善の効果を各教員が検証する取り組みを実施した。また、9 月には、FGPA を導入し、単位の実質化に先進的に取り組んでいる東北文科大学短期大学部より加藤大鶴氏を招き、テーマ「成績評価の適正化への取り組み」の講演会を開催した。加えて、今後の組織的 FD 活動に資するため、特色のある FD 活動を実践している大学を視察した。本報告は、「ボトムアップ型 FD」や「ラーニング・コミュニティ」等を実践している南山大学短期大学部と、教員の授業改善レポートの冊子にまとめて公開したり、教員間相互授業聴講の期間を授業担当教員が自由に設定したり、本学と異なる仕方で行っている金城学院大学について、FD 活動の特色をまとめたものである。視察日は次のとおりであった。

・2011 年 11 月 10 日（木）

南山大学短期大学部（名古屋市昭和区）

・2011 年 11 月 11 日（金）

金城学院大学（名古屋市守山区）

2. 南山大学短期大学部

2.1 大学の概要

南山大学短期大学部は今年度 4 月から南山短期大学から改組されたもので、英語科学生定員 150 名に対し専任教員 15 名で臨んでいる。南山短期大学時代から FD 活動に積極的に取り組んでおり、紀要を通じてその実践を発信してきた実績がある。その論考でも述べられている通り、FD に関するコンソーシアムや研究発表を通じての活動報告は四年制大学を対象としたものが圧倒的に多く、短期大学を対象としたものは数えるほどしかない。そのような状況で、南山大学短期大学部を視察することは、同じ短期大学としての FD 活動から学ぶことも多く、また四年制大学とキャンパスを同じくする短期大学部として本学と共通する問題意識もあるのではないかと考え、今回の視察を希望した。

2.2 FD 活動の内容

(1) 全体

南山短期大学以来の FD 活動の最大の特徴は、「FD そのものは日常の教育の延長である」と断言するその姿勢である。2005 年度以降組織的 FD に取り組んできた結果、研修会、講演会、勉強会等のプログラムを繰り返しても、一過性のイベントで終わってしまい教員が疲弊してしまう、という反省から、「ボトムアップ型 FD」を提唱し、それが基本線となっている。具体的には、教員が小グループで集まって定期的に情報交換する場を「FD コミュニティ」として継続している。そして、そこで出された話題、アイデアを記録に残し、「FD News」として学科内に配布し、情報の共有を目指す。これらをエビデンスとして積み重ねていくこと、それそのものが FD 活動であるとしている。

*1 国際文化学科 *2 生活科学科食物栄養学専攻 *3 生活科学科生活科学専攻

また、上述のように記録を重視していることも特徴的である。参考文献にあるとおり、南山短期大学紀要では、FD活動に関する報告を掲載し積極的に公開してきた。この報告によって、学外者も多く知見を得ることができる。通常の授業改善やカリキュラム改定を含めた短大としての教育活動について、紀要を通じて発信していくことの重要性が示されている。しかしながら、四年制大学の学部化した結果、今年度からは投稿規程の関係で、このような形で掲載は難しくなっているという。

(2) ラーニング・コミュニティ

現在の取り組みの中心は、2011年度からカリキュラムに導入された必修基本科目「ラーニング・コミュニティ」を用いた活動である。「ラーニング・コミュニティ（以下LC）」と呼ばれる学生のグループ活動の手法を用いて、「コア・カリキュラム」という英語関連科目群を連携させながら、全教員が担任を受け持つことによって組織的に学生指導をおこなう体制作りを目指している。LCは「参加体験型・協働学習型・課題解決型のアクティブ・ラーニング」として新カリキュラムの大きな特徴であると、大学案内や大学Webサイトで説明されている。

LCは1学年7クラスあり、英語のクラス分けの単位であると同時に、ホームルームのクラスの意味合いも持っている。週1回LCのコマが設けられており、前半45分は大教室で学年全体授業、後半45分は小教室に分かれてクラスごとに担任が指導する。今年度から使用されている校舎では、この点を視野に入れた大教室と小教室複数が、移動しやすいように配置されている。前期の初期は、全体授業ではアカデミック・スキル、PCの使い方、履修の仕方といった導入教育的内容が扱われた。クラスごとには毎週「ふり返し」用紙を書かせるが、一応共通の目安はあるものの、ある程度各担任の裁量に任されている。たとえば、「ふり返し」用紙に何を書かせるか、いつまで提出させるか、等である。ただし全体共通として、この「ふり返し」用紙は学生ごとにファイルに綴じられて提出され、必ず教員が目を通した後返却され、ポートフォリオとして継続的に指導に用いられる。

また、同学科ではこれまでも既に別科目で学生参加型のプロジェクト学習も実施されており、その内容もこの科目に含まれている。前期は「南山発見」というテーマで各クラスが発表を行った。後期は、国際理解をテーマにした課題が出されており、その一方で就職ガイダンスや全体行事（英語朗読会）もこの時間を活用することが計画されている。（なお、グループごとの学習成果は短期大学部のウェブサイトで現在公表されている。）

このクラス分けは英語教育でも学習単位となっている。クラス分けは英語の学力を配慮してなされており、コア科目と呼ばれる英語必修4科目「Reading」「Writing」「Discussion」「Presentation」は、このクラス分けで実施

される。英語科目でも、学生の主体的能動的な学習参加を求める内容になっており、LCで培われる学生の連帯感を英語学習向上につなげようとしている。

現在直接関わっている教員は、コーディネーター1名、担任7名で、来年度は2年次クラスができるので担任14名体制となる。評価は、ポートフォリオを重視しつつ、日常の小テスト、プロジェクト学習にも配点されており、標準点については担当教員間で事前に打ち合わせがなされる。

3. 金城学院大学

3.1 大学の概要

金城学院は、120有余年にわたる女子教育の歴史と伝統を誇る女子総合学園（幼稚園、中学校、高等学校、大学、大学院）である。大学は文学部、生活環境学部、現代文化学部*、人間科学部、薬学部の5学部で構成される総合大学で、総学生定員4,940名に対し専任教員186名（2011年9月現在）で臨んでいる。短期大学部は2003年に閉学されたが、本短期大学部と同様の教育分野の学科があることにより、今後のFD活動において参考になるのではないかと考えて視察を希望した。（*2012年度より国際情報学部に変更）

3.2 FD活動の内容

(1) 全体

大学全体としての取り組みは、1994年度の「学生による授業評価」より始まった。長期間実施してきた中で、学生の負担や授業改善策のマンネリ化等の問題が表面化し、それらに対応すべく実施時期を前、後期のいずれか一方にしたり、教員の担当科目の中から1科目について実施したり、仕方が改善されてきた。さらに、利便性をはかるため、2011年度はWebによる授業評価調査が試行された。これは、学生が携帯電話を使用して授業評価アンケートに回答するもので、学生の負担が軽減され、集計が容易になる等の利点があるという。Web利用の本格実施は2012年度からとなっている。本短期大学部においても、将来的な授業評価調査の仕方として、Web利用の効果や課題に関心を寄せるところであるが、ここでは、2010年度の「学生による授業評価」の概要を報告する。

学生による授業評価は、前期あるいは後期のいずれかで実施される。実施する科目は、各教員の担当科目の中の1科目である。これは、全科目を実施することが必ずしも効果があるとはいえず、逆に学生の負担が増えることで、回答（評価）がよい加減になることを防ぐためである。

「1科目では、教員が良好な評価を得やすい科目を選ぶようになるのでは？」と質問したところ、「良好な評価が得られる科目は、更なる改善策を提示することが難しいため、そのような科目の偏りは特にみられない。むしろ、全科目実施は、学生に過重な負担をかけることになる。」

とのことであった。

授業評価の設問は、「そう思う」－「どちらかと言えばそう思う」－「どちらとも言えない」－「あまりそう思わない」－「そう思わない」の5段階評価の設問が17項目、設問に該当する場合のみマークする設問が10項目、および自由記述である。学生の授業評価に対し、教員は“学生と教師をつなぐ改善レポート”を提出する。全教員の改善レポートは、“VOX POP”という冊子にまとめられ発行されている。レポートの記述方式に特に決まり事はないようであるが、多くの教員は、5段階評価の17項目の設問のうち13項目について、図1に示すレーダーチャートグラフを用い、評価得点平均値が前年度よりどのように変化したかを示し自己点検している。この“VOX POP”は、学生の保護者にも配付されている。“VOX POP”は、授業改善のみならず、保護者と教員の距離を近づける役割も果たしていると考えられる。

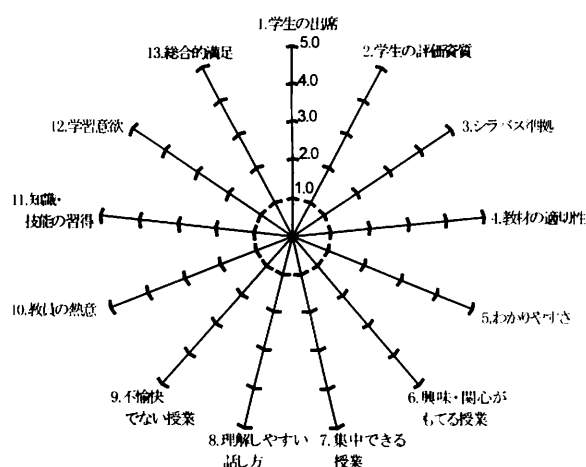


図1 評価得点平均値の表示用グラフ

授業評価以外の全学的FD活動の中で、目を引いた活動は、非常勤講師と学科教員との懇談会であった。金城学院大学では、全教員がFD活動に専念する日を1～2日設けており、FD交流集会（講演会など）と組み合わせて懇談会が計画されている。非常勤講師との情報交流は、学科全体の教育の質を高める上で重要であり、本短期大学部においては今後の課題と考えられる。

(2)学部毎の活動

金城学院大学では、全学的なFD活動にもまして学部独自の活動が活発である。今回は、生活環境学部（3学科構成）の授業聴講と、文学部（3学科構成）の研究交流会について報告する。

〈生活環境学部の授業聴講〉

生活環境学部FD委員会は、学部の全教員に対し、公開授業科目と公開する日時（1日以上）、科目の特徴的な点などを照会し、授業公開リストを作成、配付している。授業公開リストに掲載される項目を表1に示した。参考

例として「2009年度後期授業公開リスト」の「公開する日時」の欄を見ると、“いつでも可”、“最終回以外可”、“〇月〇日～〇月〇日”、“〇月”、“〇月〇日”など、毎回公開から日時指定の公開まで様々であった。学科によっては担当

表1 授業公開リストの項目

①学科
②氏名
③公開授業科目
④科目区分
⑤曜日時限
⑥教室
⑦およその履修者数
⑧公開する日時(1日以上)
⑨この科目の特徴的な点

教員の約4～5割が“いつでも可”としており、公開の機会を多くする傾向が認められた。このように全教員が授業を公開していること、公開する日時を担当教員が決められていることは、本学と大きく異なる点である。聴講教員は、授業公開リストを見て聴講したい授業の担当教員に事前に申し込み、聴講終了後に感想などを担当教員にフィードバックする。担当教員は、そのフィードバックに対してコメントを返すことになっている。

このようなフィードバックは、本学の教員間相互授業聴講では行われていない。本短期大学部は、2011年度の独自の取り組みとして、授業終了直後に担当教員と聴講教員が意見交換したり、聴講教員が“参考になった点”を記入した用紙を担当教員へ渡したり、フィードバックを試みたばかりである。今後、フィードバックの仕方を改善する上で、生活環境学部の授業聴講の取り組みは、大いに参考になるものであった。

〈文学部の研究交流会〉

文学部FD委員会は、FDの定義を幅広くとらえている点に特徴がある。“教育体制”や“成績評価”等に関するFDセッション、他大学の講師を招いてのFD講演会に加え、学部教員による「文学部研究交流会」を実施している。これは、教員の研究活動を交流にすることもFDの一環と位置づけ、教員の中から1～2名が講師となり講話するものである。

この研究交流会の説明を受けたとき、本短期大学部の前身である岩手県立盛岡短期大学で行っていた「研究談話会」が思い起こされた。当時は、研究分野の異なる教員の研究交流を目的とし、「研究談話会」が毎年開催されていた。本短期大学部に名称変更して以来行われていないが、今後のFD活動の展開を考える上で、文学部のFDに対する考え方は参考になるであろう。

4. おわりに

南山大学短期大学部の「ボトムアップ型FD」は、考え方として非常に参考になるものであった。一時的なイベントで終わらないFD、通常の教育・研究活動の延長線上にあるFDについて考えることは大きな意義がある。紀要の活用については、今年度の研究紀要委員会の方針で、「実践報告（授業改善や学生活動といった教育研究に関

する実践活動などの報告)」も積極的に受け付けることとなった。これもまた、本短期大学部のFD活動の一步といえよう。

「ラーニング・コミュニティ」については、初年度の導入教育という観点だけでなく、英語教育はもちろん、学生主体のプロジェクト参加型教育という面からも注目に値する。全学的に就業力育成支援に取り組んでいる今日、示唆的な内容を多く含んでいる。

金城学院大学の“授業評価”や“授業聴講”は、本学と異なる仕方では実施されており、本短期大学部のFD活動に多くの示唆を与えてくれた。授業評価は、とにかく担当教員と履修学生に関わるものと考えがちであるが、授業改善レポートを冊子にまとめて保護者に配付することは、授業改善にとどまらず、保護者の大学教育への理解に役立つと考えられる。また、フィードバックを大切にする授業聴講の仕方は、聴講教員のみではなく授業担当教員にとっても教育力の向上につながると考えられる。

非常勤講師と学科教員との情報交流は、学科全体の教育をより良くするために重要と考えられ、今後の本短期大学部の課題と考えられる。また、教育面だけではなく研究面もFDの一環とする考え方は、今後のFD活動を柔軟に展開する上でいくつかの示唆を含んでいる。

以上、紀要論文として発表されていること以外にも、南山大学短期大学部、金城学院大学のFD活動の詳細を伺うことができ、大変参考になり有意義な視察であった。

謝辞

視察にあたり、懇切なご説明とご対応をいただいた南山大学短期大学部の五島敦子先生、伊東留美先生、短期大学部長山田泰広先生、金城学院大学の副学長成瀬正春先生、浅井邦昭先生、総務部中村徹さんに感謝の意を表します。

さらに、日頃よりご協力をいただいた本学教育研究支援室教育・国際交流グループの皆さんに感謝申し上げます。

参考文献・URL

伊東留美、五島敦子(2009). 短期大学部におけるボトムアップ型FD——「FDの実質化」に向けて—— 南山短期大学紀要 37号, 141-170

伊東留美(2010). アメリカ合衆国におけるラーニング・コミュニティの歴史的背景とその展開 南山短期大学紀要 38号, 87-110

五島敦子(2010). 日本の高等教育におけるラーニング・コミュニティの動向 南山短期大学紀要 38号, 111-131

関口知子(2010). 必修基本科目「ラーニング・コミュニティ」の可能性と課題——科目間連携による大学祭プロジェクトの事例から—— 南山短期大学紀要 38号, 133-155

<http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/tandai/outline/learning.html>

<http://www.kinjo-gakuin.jp/idea/history.html>

<http://www.kinjo-u.ac.jp/kgm/kokujyo.html>

金城学院大学 VOX POP 学生と教師をつなぐ授業改善レポート VOL.7 (2011)